



▲晴天に恵まれ、新緑がまぶしい定禅寺通を走るランナーたち

市政トピックス

新緑のまちをランナーが駆け抜ける―杜の都ハーフ開催

5月12日に第29回仙台国際ハーフマラソン大会(杜の都ハーフ2019)が開催され、1万3198人の選手たちが、杜の都を駆け抜けました。

今年も、国際姉妹・友好都市などからの招待選手のほか、4月にプロ転向し、通算9回目の出場となる川内優輝選手など、多くの実力者が参加しました。

今大会からハーフマラソンコースは、宮城野通など仙台駅東側を新たに走るコースに変更。従前より市街地を走るコースとなり、沿道からランナーに途切れない声援が送られていました。

また、仙台市出身の村山謙太選手が初出場。沿道からのひとときわ

市政トピックス

羽生結弦選手の新しいフィギュアスケートモニュメントを設置しました

平昌冬季五輪フィギュアスケート男子シングルで金メダルを獲得し、66年ぶりの五輪2連覇という偉業を成し遂げた羽生結弦選手の功績をたたえるため、地下鉄国際センター駅前に新たなモニュメントを設置しました。

市では、平成29年に日本フィギュアスケート発祥の地である五色沼そばのこの地に、トリノ五輪金メダリストの荒川静香さんと羽生選手の功績を顕彰するモニュメントを設置。新しいモニュメントは、



▲発表式でモニュメントを披露した羽生選手

これに並ぶよう配置されています。モニュメントの設置に先立ち、4月20日にデザイン発表式を開催。約2万通の応募から抽選で選ばれた約600人の観客が参加しました。羽生選手は「荒川さんの隣に自分が『2人』並ぶのはとても恐縮ですが、2連覇したのだからと感慨深い気持ちです。これをきっかけに、仙台に足を運ぶ人が増えてほしいですし、モニュメントは表情、ポーズなど細かく作られているので、この2つをじっくり見比べてみてほしい」と笑顔で語っていました。

また、4月29日の除幕式には、市内でフィギュアスケートの練習に励む子どもたちや市民など約6

市政トピックス

市政トピックス

錦ヶ丘中学校が開校しました

市内66番目の市立中学校として、生徒数が増加した広瀬中学校から分離し、錦ヶ丘中学校が創立されました。4月5日に開催された開校式には2・3年生や地域住民の皆さんなど約480人が出席。佐藤淳一校長は「学べることへの感謝の気持ちを抱き、新たな中学校の未来



▲新校舎の体育館で行われた開校式



▶錦ヶ丘中学校の新校舎。開校式の後は校内覧会も行われました

市政トピックス

「仙台市役所経営プラン」を策定しました

市では、平成28年度に策定した「仙台市行政改革推進プラン2016」を改定し、令和4年度当初までを計画期間とする「仙台市役所経営プラン」として、策定しました。

これは、本格的な人口減少・少子高齢化社会が到来する中で、市役所経営の方針を明確化するとともに、本市のさまざまな施策の推進を支えるものです。「ポスト復興ステージ」を支える行政運営、「地域課題解決のための現場主義に立脚した市民協働の推進」、「人材の力をフルに活用し挑戦する組織への変革」を実施方針として、98の実施項目に取り組みしていきます。

仙台市役所経営プランは、市役所本庁舎1階市政情報センターなどのほか、市ホームページでもご覧いただけます。

市政トピックス

40万人が来館―縄文の森広場

4月30日、縄文の森広場の入館者数が40万人を達成しました。縄文の森広場は、山田上ノ台遺跡で発見された縄文時代の集落跡を保存・活用するため、平成18年に開館した施設。遺跡を通して、縄文人の生活や技術を学ぶことができます。

市政トピックス

記念イベント

では、40万人目となった愛知県から来た中学1年生の浅井佑介さんに、花束と記念の矢尻セツトが手渡されました。浅井さんは初めての来館。「天気の良い日にまた来たいです」と話していました。



▲家族と訪れた浅井さん(左から4番目)

3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊からよりすぐりの本を「紹介します」。

「半減期を祝って」



津島佑子/著 講談社 刊

2045年の「極東のニホンという国」に生きる「トウホク」という少女が主人公。ニホン国は、34年前にトウホク地方で発生した原子力発電所の事故で放出された「セシウム137」の半減期到来で、祝賀ムードに沸いていきます。政府が組織した「愛国少年(少女)団IIASD」には14歳から18歳までの純粋な「ヤマト人種」の少女少女が入団し、反社会的人間を駆り出す使命を負っています。そして最も排除され、辺境に追いやりられているのが「トウホク人」です。

静かな衝撃を与えるこの短編は、津島佑子の遺作となりました。この作品は、やがて来る2045年を生きる読者に、作者が最後に託したメッセージです。 ※ポーランドの詩人、ピスワバ・シンボルスカの詩の一節

「春を恨んだりはいらない 震災をめぐって考えたこと」



池澤夏樹/著 写真 池澤夏樹/著 写真 池澤夏樹/著 写真 池澤夏樹/著 写真

東日本大震災直後から被災地に入って現場を歩き、被災した人たちの声を聴きながらまとめたリポート。小説のみならず、詩、翻訳、随筆、評論など幅広い分野の著作があり、さらに大時代は物理学を専攻していた作者は、被災地の現状と被害、原子力発電所の事故を客観的・論理的に伝えています。一方で「東北再訪」の章では、8カ月後に再び訪れた東北の姿を、宮澤賢治の詩や柳田國男の「遠野物語」を引用しながら記しています。

収録されている鷺尾和彦撮影の被災地の写真と、「春を恨んだりはいらない」(※)というタイトルが、読者の心を静かに捉えます。

紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585